

ミスマッチの背景

大橋 勇雄

失業率が高止まりするたびに、あるいは若年者のフリーターが増加するたびに、ミスマッチが話題になる。これはどこの国でも共通しているようだ。日本では、とりわけ、若者の職業選択に関心が集まる。いわく、最近の若者は仕事へのこだわりが強く、仕事の選り好みが多い。学校から職場へと生活を円滑に移行できない者が多いから、在学中のキャリア教育を充実させる必要がある、等々である。これらの議論は、直截的で多くの人々の共感をえやすいが、筆者には何か抜け落ちているような気がする。

学卒後の離職率に関して「七五三」現象が話題になってからすでに久しい。にもかかわらず、若者のミクロ的な行動ばかりが目され、その背景にある経済の動きが見逃されがちである。特に、筆者には次の二つの視点、すなわちマクロ的な需給動向と企業サイドの雇用管理に関する視点からの議論が乏しいように思われる。今後の展開を期待してその意味を少し考えてみよう。

最初の視点は、職業の二極分化と進学率の上昇との関係である。欧米での最近の研究によれば、IT技術の進展や経済のグローバル化のもとで、高い専門知識や技術を必要とする高スキル業務（例：研究・開発、コンサルタント、医師、技術営業職など）と、高いスキルを必要としないが、IT技術に代替されにくい手作業的な低スキル業務（例：守衛、運転手、介護、清掃、レジ係）が増大する一方で、中間的な業務（例：経理、収集・仕分、記録、窓口業務、事務）が減少しているとされる。このことは、日本でも確認されつつある。また経済のグローバル化は国内企業に対し経費削減圧力を強め、低賃金の非正規労働者の需要を増大させている。

こうした職種への二極化に対して労働の供給側の動きはどうだろうか。1990年代に入って進展したIT化の中で、高スキル業務の担当が期待される大学進学者は増加した。特に、大学院進学者の増加は著しい。他方、中間的な業務の主な担い手

である高卒や短大卒の就職者は激減している。したがって、一応、供給側もそれなりの対応をしているかに見える。しかしながら、問題は需給のバランスである。いかに高スキル業務が増大したとはいえ、条件をととのえ就業を希望する者に対して十分な量があるのだろうか。また中間的な業務への就業を期待する者はその需要の減少によって低スキル業務に甘んじなければならない。こうした状況の中で希望を叶えるのが難しい者はどのようなコースをたどらねばならないのだろうか。もしミスマッチという現象がそのプロセスで発生しているのであれば、真の問題はミクロではなく、マクロにあると言えよう。

もう一つ看過できない視点は、企業の雇用管理のあり方である。すでに40年ほど前から、学卒後、3年程度で離職する者が多いことは指摘されている。それは長期雇用のもとでも3年程度経てば企業内部でのキャリアを見通せるからだと言われた。現在はどうだろうか。低成長下で多くの企業には新卒者をじっくり育てる余裕はなく、即戦力を求めがちである上に、新卒者を育てるにしても選別を厳しくして早期に対象者を絞るという政策がとられているように見える。逆の立場から、新卒者には企業内でのキャリアの見通しが早く立つようになってきているのである。

高スキル業務の増大は、こうした傾向に拍車をかける。開発・設計やシステム・エンジニア、コンサルタント、会計士などは、プロジェクトのもとにチームで活動することが多く、それぞれが優秀な専門家を求める。こうした中で新人の立ち位置は限られた予算との比較で微妙である。なかなかチャンスに恵まれず、離職する者も多いと聞く。

ミスマッチは、供給側と需要側との間の情報不足のゆえに、生じるという論調が多い。問題は情報不足だけなのだろうか。筆者にはその裏側にはもっと深い問題が潜んでいるように思えてならない。

（おおはし・いさお 中央大学大学院戦略経営研究科教授）